

パリ大全

(エリック・アザン著／杉村昌昭訳 以文社 4725円)

<略歴>36年生まれ。出版社主、著述家。邦訳著書に「占領ノート—ユダヤ人が見たパレスチナ生活」。



遊歩者の視点で案内

パリほど頻繁に文学で語られ、絵画に描かれ、写真に撮られ、映画の舞台になってきた町はない。そんなパリだから、歴史書も無数にある。本書もその一つということになるが、その詳細で感覚的な叙述は類書には見られない。

全体は3部に分かれている。第1部「巡視路」は、パリのそれぞれの限界(かいわい)の成り立ちと姿を、中世から現代までたどってみせる。その叙述は、パリ中心部の旧パリから、周辺部の新パリ、さらに郊外の村へと放射状に展開し、同時に、セーヌ川を挟んで、右岸と左岸を往復する。建築物や通りにまつわる歴史的なエピソードや、著者の個人的な感想が楽しい。パリの町を歩きつづけた者だからこそ書ける逸話が、ページを開くごとに溢(あふ)れ出る。

「赤いパリ」と題された第2部は、革命や暴動の舞台としてのパリを論じる。パリは芸術の都であるのみならず、フランス革命から1968年の5月革命にいたるまで、フランスを変えた歴史的ドラマの舞台でもあった。革命の時に通りに作られるバリケードは、フランスの民衆が発明したものだ。

そして第3部「雑踏のパリに行く」では、遊歩者としての著者のまなざしがもっともよく示される。その著者を導いてくれるのが、作家のバルザックやボードレールであり、画家のクールベやマネであり、写真家のマルヴィルやブラッサイである。都市を知り、味わうためには歩かなければならない。こうして文学、絵画、写真などの芸術が、いかにパリと深く結びついているかが明らかにされる。

都市は自然にできるのではなく、住民たちが築きあげるものだ。パリは、パリ市民の意志と感性によって創られたことがよく分かる。400ページを超える分厚い本なので持ち歩くには少し重いですが、本書を片手にパリを歩き回れば、おしゃれで華やかな都とは一味違う、パリの新しい表情が見えてくるのはまちがいない。

評 小倉孝誠 慶応大教授

[戻る](#)

[北海道新聞](#) Copyright(c) The Hokkaido Shimbun Press.